

〔論文〕

乳児保育における 保育者との関係性（Ⅱ）

—乳児の「泣く行為」の内容分析—

佐々本 清 恵
Kiyoe Sasamoto

大 方 美 香
Mika Oogata

大阪総合保育大学大学院
児童保育研究科

大阪総合保育大学児童保育学部

要旨：本研究は、保育実践における乳児の「泣く行為」に焦点を当て、「乳児の泣く行為の意味」とそれに関わる「保育者の役割」を明確にすることを目的としている。本研究では、2012年、A市A保育所に入所した乳児10人の観察記録から泣く行為の記述を取り出し、取り出した事例を9のカテゴリーに分類し、保育者や大人の働きかけの重要性を導き出すことを試みた。その結果、保育者との関わりで泣く行為は「直接的な保育者への欲求」の他に「物や行動を介しての欲求」や「物や行動を介しての不快」等と重複することが多かった。物との関わりでは、月齢が高くなるにつれて、泣く行為の割合も増加した。行動との関わりで泣く行為は、低月齢児でも見られたが、その内容は月齢によって変化していった。子ども同士の関わりで泣く行為は、月齢が高くなるにつれて少しずつ見られるようになった。保護者との関係では、月齢の低い乳児でも入所による環境の変化を敏感に感じ取り泣く行為で表していた。また、乳児は体調の悪さを泣く行為で表し、保育者も乳児の泣く行為を体調の悪さに結びつけて接していた。睡眠中の乳児の泣く行為にも充分注意する必要がある。このように、乳児が泣く行為には、色々な意味があり、その内容は、個人、月齢、環境、体調等によって様々であった。よって、個人、月齢、環境、体調等で違う乳児ひとり一人の泣く行為への「応答的な関わり」が必要であり、一年を見通した保育者や大人の働きかけや役割の重要性が指摘された。

キーワード：乳児、泣く行為、保育者の役割

I 研究の目的

保育所の保育実践は集団生活の中で行われる。その保育現場で保育者¹⁾が困ることの一つに、子どもが「泣く行為」がある。これは、筆者がA市で0歳児と1歳児を担当していた保育者173人を対象に、2012年5月から7月にかけて行った質問紙調査²⁾からも明らかであった。実に147人(約85%)の保育者が「クラスの子どもが泣き止まずに困ったことがある」と回答していた。この結果からも、保育者にとって乳児が泣く行為は、保育実践のなかで大きな意味を持っていると思われた。よって筆者は「乳児保育における保育者との関係性(Ⅰ)」³⁾で乳児の泣く行為を「情動」⁴⁾に焦点を当てて考察を試みた。結果、「乳児に働きかける存在としての大人の役割」が重要であり、観察記録を分析し保育に役立てることの重要性も指摘された。

一方、近年乳児の発達を科学的に解明しようとする研究が盛んに行われ、「胎児や新生児といえども感覚能力を超える、より高次的な機能—外からの刺激をとらえて識

別する「認知」などいくつかの能力—をすでに獲得していることが証明されるようになった」(小西, 2003)や「現在では、生後まもない新生児でも、さまざまな能力もっていることが明らかにされています」(開, 2011)等、乳児の様々な可能性がわかってきた。それに従い「子どもが示す様々な行動や欲求に、大人が適切に応えることが大切である」(保育所保育指針解説書, 2008)等、乳児期における大人の関わり的重要性を指摘する声も聞かれるようになった。しかし、集団保育における乳児の泣く行為の研究が少なく、また「乳児に働きかける存在としての保育者の役割」を「保育の質」に結びつける研究が少ないのも現状である。よって筆者は、保育者が乳児の泣く行為をどのように捉えているか、さらに泣く行為の変化を観察記録から分析した上で、乳児保育における保育者との関係性を考察し、その意義と課題を明確にすることで、乳児保育における保育者の関わり的重要性を追求することにした。

表1 対象となる乳児とその月齢

対象児	入所	進級及び退所	入所時の月齢	退所時及び進級時の月齢
A 児	4 / 1	3 / 29	11 か月	23 か月
B 児	4 / 1	3 / 29	10 か月	22 か月
C 児	4 / 1	3 / 29	10 か月	22 か月
D 児	4 / 1	3 / 29	9 か月	21 か月
E 児	4 / 1	3 / 29	6 か月	18 か月
F 児	4 / 1	3 / 29	5 か月	17 か月
G 児	4 / 1	3 / 29	5 か月	17 か月
H 児	4 / 1	3 / 29	3 か月	15 か月
I 児	4 / 1	5 / 31	4 か月	5 か月（途中退所）
J 児	10 / 20	3 / 29	11 か月（途中入所）	16 か月

Ⅱ 方法

1 観察の対象

A 市 A 保育所 0 歳児クラス 10 名。記録の抽出月齢は満月齢とする。（表 1）

2 観察の期間

2011 年 4 月 1 日～2012 年 3 月 29 日の進級前日までの約 1 年間。

3 分析方法

0 歳児クラスの保育者 3 名が、それぞれ担当した乳児 3 名について記した個人記録から、全ての泣く行為を取り出した。取り出した記述内容はカテゴリー化し考察を行った。なお乳児の泣く行為には、重複する意味があることを前提として複数で検討を行った。その後、カテゴリー化した内容を用いて、対象となった乳児ごとの泣く行為の件数と割合、月齢ごとの泣く行為の件数と割合の分類を行った。

4 倫理的配慮

観察記録の閲覧は、所長や記録者である保育者、保護者の了解のもと行った。また観察記録からの泣く行為の取り出しは、個人情報保護の観点からコピーや持ち出しはせず、手書きの記録紙を用いた。記録紙は分析後速やかに破棄した。

Ⅲ 結果

1 泣く行為のカテゴリー

表 2 は、観察記録の内容分析に用いた 9 のカテゴリーとその下位カテゴリーである。カテゴリー内容は、観察記録の事例を基に以下の内容で分類した。

① 生理的欲求

生理的欲求は食事、睡眠、排泄、その他の 4 つの下位カテゴリーとした。4 つのカテゴリーの内、食事は乳児のミルクへの欲求も食事として捉えた。また、食事に関係する事柄でも、食事中に泣く等、生理的欲求として捉えられない内容は含まないこととした。睡眠は、保育者が「乳児が睡眠を欲求していると感じた観察内容」のみを入れた。排泄は出る前に泣く行為とし、出た後に泣く行為はその他に入れた。

② 保育者との関わり

保育者との関わりは、欲求、不快、嫉妬・羨ましさ、人見知り、その他の 5 つの下位カテゴリーに分けた。欲求は、乳児が直接的な保育者との関わりを欲求した場合と物や行動を介して欲求した場合があるが、どちらも保育者への欲求として捉えた。保育者への欲求が物や行動を伴う事例に関しては、1 事例に複数の要素があるものとした。不快は、保育者の働きかけに対しての不快と物や行動を介しての不快があったため物や行動を伴う事例に関しては、1 事例に複数の要素があるものとした。嫉妬・羨ましさは、子どもという第三者を介したものであるが、嫉妬・羨ましさとして保育者との関わりのみに入れた。人見知りには「知らない人を見て」のように識別として受け止められる場合と親しい保育者に対しての「後追いの時期に見られる場合」があったが、このデータでは正確な判断ができなかったため、いずれも「人見知り」として捉えた。その他は、欲求、不快、嫉妬・羨ましさ、人見知り以外の保育者との関わりとした。

③ 物との関わり

物との関わりは、欲求、不快、その他の 3 つの下位カテゴリーに分けた。欲求は、物への直接的な欲求とした。不快は物への直接的な不快と保育者の関わり方を介した

不快があったため、保育者の関わりが含まれる内容に関しては、1事例に関して複数の要素があるものとした。その他は、欲求や不快以外の物との関わりとした。

④ 行動との関わり

行動との関わりは、欲求、不快、その他の3つの下位カテゴリーに分けた。欲求は、行動への直接的な欲求とした。不快は行動への直接的な不快と保育者の関わり方を介した不快があったため、保育者の関わり方が含まれる内容に関しては、1事例に関して複数の要素があるものとした。その他は、欲求、不快以外の行動との関わりとした。

⑤ 子ども同士の関わり

子ども同士の関わりは、欲求、トラブル、その他の3つの下位カテゴリーに分けた。欲求は、子ども同士の関わりを求めて泣いた場合とした。物や行動を介した子ども同士のトラブルについては1事例に関して複数の要素があるものとした。その他はトラブルに発展してはいな

いが、子ども同士の関わりで泣く行為とした。

⑥ 保護者との関わり

保護者との関わりは、入所（2週間以内・環境の変化も含む）と登所・降所、その他の3つの下位カテゴリーに分けた。入所（2週間以内・環境の変化も含む）を登所・降所と分けたのは、保育所に入所する乳児にとっての入所時の環境の変化は、保護者との分離という以外にも特別な意味を持つものであるからである。また、入所時に泣く行為の目安を2週間以内としたのは、だいたい2週間ではほとんどの乳児が登所時泣かなくなり、観察記録の「笑う・微笑む」の記述が増え、生活リズムが整い、担任保育者の顔を覚えたことにより、環境に慣れたと判断したためである（表5）。登所・降所は、環境に慣れた段階での保護者との別れや出会いの泣く行為とした。その他は行事を含めた保護者との関わりとした。

⑦ 体調

体調は、病気とその他の2つの下位カテゴリーに分け

表2 観察記録の内容分析に用いた9のカテゴリーとその下位カテゴリー

①	生理的欲求	食事	1a
		睡眠	1b
		排泄	1c
		その他	1d
②	保育者との関わり	欲求	2a
		不快	2b
		嫉妬・羨ましさ	2c
		人見知り	2d
		その他	2e
③	物との関わり	欲求	3a
		不快	3b
		その他	3c
④	行動との関わり	欲求	4a
		不快	4b
		その他	4c
⑤	子ども同士の関わり	欲求	5a
		トラブル	5b
		その他	5c
⑥	保護者との関わり	入所時（2週間以内・環境の変化も含む）	6a
		登所・降所	6b
		その他	6c
⑦	体調	病気	7a
		その他	7b
⑧	理由不明		8
⑨	その他		9

た。病気は、熱、咳、下痢等直接病気と思われるものとした。その他は、疲れ、病み上がり、現在病気ではないが体調による機嫌の悪さで泣く行為とした。

⑧ 理由不明

理由不明は、保育者が理由を感じ取れなかったものであるが、保育現場ではよくみられる事例であるためカテゴリーの一つとした。

⑨ その他

①～⑧のカテゴリーに分類できなかったもの、あるいは、その記述だけでは判断できなかったものとした。

2 カテゴリーに基づく泣く行為の分布と分析

表3は「9のカテゴリーとその下位カテゴリーの分布表」である。また表4は「月齢による泣く行為の要素件数とその割合」をまとめたもの、図1はそれをグラフ化し「泣く行為の月齢別の変化」としてまとめたものである。結果は次のようになった。

① 生理的欲求

生理的欲求に対する記述回数は全体の12%であったが、月齢が高くなるにつれて少なくなり、生後12か月まででほぼみられなくなった。記述内容は、食事欲求(1a)と睡眠欲求(1b)が多く、排泄(1c)に関しての記述は1場面のみだった。その他、排泄において「出た後で泣いた(1d)」は1場面であった。

② 保育者との関わり

保育者との関わりに関しては、入所当初から記述がみられ、どの月齢においても記述回数が多かったが、特に生後13か月から15か月の期間に多く、泣く行為全体の42%を占めていた。その理由については、保育者の関わりを「欲求」「不快」「人見知り」に分け図式化した図2から、この時期「人見知り」が始まる乳児が多かったことと関係していた。

保育者への欲求(2a)は、「抱っこしてほしい」「傍にいてほしい」等の保育者への欲求のみの記述や、E児8か月の「欲しい物がとれず泣く」という、保育者への欲求(2a)と物への欲求(3a)が重複していると保育者が捉えているものがあった。また、F児7か月の「タオル遊びがしたくて泣く」という保育者への欲求(2a)と行動への欲求(4a)が重複しているものがあった。その他の保育者への欲求としては、F児6か月の「腹ばいで遊んでいてしんどくなって泣く」という、腹ばいという行動への不快(4b)と保育者に助けを求めるといった保育者

への欲求(2a)の重複があった。また、D児15か月でみられた「新入児に関わる保育士を見て、自分もしてほしくて泣く」というような嫉妬・妬ましさで泣く(2c)行為と保育者への不快(2a)の重複もみられた。このように、保育者への欲求には、他の要素と重複しているものも多くみられ、重複する内容は、物への欲求、行動への欲求、物への不快、行動への不快、等様々であった。

保育者との関わりでの不快(2b)では、親しくない保育者への不快(人見知り)はあったものの、親しい保育者自身への不快はみられなかった。反面、たとえばE児8か月での「薬を飲むのを嫌がって泣く」の薬への不快(3b)とそれを飲ませようとする保育者の要求への不快(2b)、またはD児14か月での「服を脱ぐのを嫌がって泣く」のように服を脱ぐという行動への不快(4b)と服を脱がせようとする保育者の要求への不快(2b)の重複がみられた。また、「玩具を取りに行っただけで泣く(3a)や「水遊びを止められて怒って泣く(4a)(A児16か月)等、乳児の物や行動への欲求とそれに関わった保育者への不快(2b)が重複している場面もあった。このように、保育者との関わりにおける不快は、物や行動に対する不快がそのまま保育者との関わりにおける不快に結びつくのではなく、乳児の欲求と保育者の乳児への要求が合わなかった場合にも乳児が「泣くという行為で不快を表す」ことが示された。

また、「好きなものだけ食べていやいやをして泣く(D児21か月)の記述のように、保育者は乳児が泣く行為とそれに関連した手ぶりや顔の表情から、乳児の泣く行為を前言語的コミュニケーションとして受け止め、その意味を理解しようとしていることが伺えた。

人見知り(2d)に関しては、D児、E児、G児、H児、J児に記述がみられ、回数も1回で終わるものもあれば、3か月に亘って記述されている乳児もあった。また、内容は、識別のみを伺わせるものから保育者への後追いを含むものまであり、内容の更なる分析が必要である。

なお、保育者との関わりは、本研究の重要なテーマであるため、「保育者との関わり」の項で詳しく述べることにした。

③ 物との関わり

物との関わりについては、表4「月齢による泣く行為の要素件数とその割合」や図1「泣く行為の月齢別の変化」で示したように、月齢が高くなるにつれて物との関わりで泣く行為の割合も増加していた。また、全ての乳児において物に対しての泣く行為があり、その内容は、物への欲求(3a)と物への不快(3b)があった。なお、月齢が高くなるにつれて物との関わりでの泣く行為の割

合も増加していた背景には、園の保育方針「1歳を過ぎてから大きな催し物に参加する」ということが影響していると思われた。1歳を過ぎて、初めての物に出会う機会を多く持つようになった乳児は、それまで以上に物との関わりを深めていき、それに伴い乳児が物に対して泣く行為が増加していく。保育者は、乳児が新しい物にであう時には十分に配慮する必要がある。

④ 行動との関わり

行動との関わりについては、表4「月齢による泣く行為の要素件数とその割合」や図1「泣く行為の月齢別の変化」で示したように、ほとんどの乳児に行動との関わりでの泣く行為がみられた。しかし、その内容については、5か月での「腹ばいでしんどくなって泣く」のように一人の時に泣くもの、21か月での「遊びを制止されて泣く」のように、第3者が関わっているもの等、月齢によって内容の変化があった。また、内容には、行動への欲求(4a)と行動への不快(4b)があった。乳児の行動との関わりで泣く行為は、乳児の泣く行為が保育者の乳児への要求と結びついているものもあった。

⑤ 子ども同士の関わり

子ども同士の関わりで泣く行為の記述は多くはなかったが、月齢が高くなるにつれて少しずつ見られるようになった。また、記述があった乳児は6人と多かったが、記述のない乳児もおり、こども同士の関わりで泣く行為には個人差がみられた。内容は、場所の取り合い等子ども同士のトラブルもあるが、単に接触が嫌だという単純なもの、「新入児に関わる保育者を見て自分にも関わって欲しくて」のような第3者を介するものもあり、月齢により、あるいは個人により内容の違いがあった。また、子ども同士の関わりを欲求して泣く行為は「園庭で兄を見て」というように、兄という関わりの深い親しい子どもに向けられていた。集団保育の場合、子ども同士の関わりは、重要な保育の課題となっている。乳児は1対1の関わりを重要視する年齢であるが、同時に保育所は子ども同士が関わる場でもある。発達に沿った環境設定、保育者の関わり等、更なる考察が必要である。

⑥ 保護者との関わり

保護者との関わりで泣く行為は、入所時(6a)がもっとも多く、環境の変化も含めた保護者との別れで泣く行為は、10人中9人にその記述が見られた。また、記述回数には個人差があり、どちらかという10か月を過ぎて入所した乳児の記述回数が多かった。その結果、月齢の低い乳児でも入所による環境の変化を敏感に感じ取る

が、慣れるという観点からは、比較的月齢の低い方が慣れやすいのではないか。いずれにしても、乳児にとっての入所は大きな環境の変化であり、保育者にはそれを踏まえた保育環境作りが必要である。

入所時以外の登所・降所で泣く行為(6b)の記述は、B児、C児、D児、G児、H児、I児にみられ、内容は行事等日頃の保育所生活とは違う状況での保護者との別れで泣く行為や久しぶりの登所で泣く行為の記述がみられた。その他(6c)では、運動会の最中に泣く等、たとえ保護者と一緒でもいつもと違う雰囲気の中で泣く場面がみられた。

このように、乳児にとっての環境の変化は、たとえ保護者と一緒であっても、大きな負担につながることを理解しておく必要がある。

⑦ 体調

体調によって泣く行為の記述には月齢による変化はなく、ほとんどの乳児にその記述がみられた。これは、言葉で表すことができない乳児が、体調の変化を「泣く行為」で表すということと、保育者は泣く行為を「体調の悪さに結びつけて接している」といえるのではないか。ただし記述がなかったE児とG児については、「体調を整えて登所している」「熱や痛みがあっても泣かない」等、様々な要因が考えられるので、その意味を考察することはできなかった。記述内容については、病気(7a)での記述回数6回、その他(7b)での記述回数16回と、病気以外の体調の悪さで泣く行為の方が多くみられた。これには、病気の時は欠席していることも関係していると思われるが、乳児保育では養護の果たす役割が大きいことを示している。

⑧ 理由不明

保育者が理由を見つけることができずに、乳児が泣いたと記述があったのは、全体で6場面であった。全体としては少ないが、保育者が困る乳児の泣く行為の一つに、「理由がわからなくてグズグズ泣く」というのがある。この状態を考察するためのデータはないが、保育者は、乳児は保育者にはわからないことで泣く状況があることを知っておくことも大切である。

⑨ その他

特に考察の必要性を感じた内容は以下の記述である。

- 事例1 睡眠中にうなされて泣く
- 事例2 お昼寝中寝苦しうにして泣く
- 事例3 睡眠中に泣く

乳児保育における保育者との関係性（Ⅱ）

表3 9の категорияとその下位 category の分布表

9の categoryとその下位 category の分布表										
月齢	A 児	B 児	C 児	D 児	E 児	F 児	G 児	H 児	J 児	I 児
3								1b 1b 6a 6a 9		
4								1a 1a 1b 1c 7b		1a 1a 1a 1b 6a 7a
5						1b <u>2a6a</u>	1a 1a 1b 2a 6a	1a 1a 1b 1b 1b 1b 1b 2a 9		1a <u>2a7b</u> 6b
6						1b <u>2a4b</u> <u>2a4b</u> <u>2a4b</u>	1a 1a 1b	2a		
7					1b 1b 1b 1b 1b <u>2b4b</u> 9	<u>2a4a</u> 9	2a 8 9	1a 2a 2a <u>2a4a</u> <u>2a3a</u>		
8					<u>2a3a</u> <u>2b3b</u> 2d 4b	1a <u>2a4a</u> <u>2a7b</u> 9	1b 5c	2a 4b 6b 7b		
9				6a	<u>2b4b</u> 9a	<u>2b3b</u>	1e	1b		
10			6a 6a 6a 6a	2a 2d 6a 6a 6a 6a <u>3a5b</u>	3b	1a 2e 5b <u>2b4a</u> 7a 9a	9	1b 3b 9		
11	欠席	2a 6a 6a 7b	1a 4b	2d 3b 3b 4b	2a	2a 2a <u>2b4b</u>	1b		6a 6a	
12	6a 6a 6a 9 <u>2b4a</u>	3b		2a 2a 9 3b <u>2a3a</u> <u>3a5b</u> <u>3a5b</u>	6c		<u>2a4a</u>	2d 3b 3b	<u>2b4b</u> <u>2c3a</u> 7a 9	
13	2a 2a 3c 4b 4b	<u>2b3a</u>	2a	3b		7b 7b	<u>2a2c</u>	2a 2a 2d 2d 3d 4b	1b 2d 4d	
14	8 8 2a		2a	2a 2d <u>2a2d</u> 7a <u>2b4a</u> <u>2b4b</u>		2a <u>2a3a</u> 3b	2d 4a 4b	2d 3b 4b 7a 7b	2d 3a <u>3a5b</u> 4b 9	
15	2a 5b <u>2b4a</u>	7b 8	6b 2a 7b	2a 2a 2a 2a 2a <u>2a2c</u> 3a <u>3a5b</u> <u>6b6c</u> 7a	3b	3b	6b	2d 3b		
16	<u>2b4a</u>	6b 9	2a	2e <u>2a3a3b</u> 3b <u>2b3b</u> 4a 5a 9	<u>2a4a</u> <u>2b4a</u> 3a <u>3a5b</u> 4b	<u>2b4a</u> <u>2b4a</u> 3b 5b	9		2a 3b 3b 3b 8	
17			2a 2a 6c 6c		4b 3b	2a			8	
18	4b	6c 7b 4c	<u>2a3b</u>	<u>3a5b</u> 7b 7b 7b 9						
19		<u>2a4a</u> 3b 9 9		<u>2b4b</u> <u>3a5b</u> 3b 5b						
20	3b	3b 4b	3b	3a						
21	3b	2a 3a 3b 3b	2a <u>2a3b</u>	2a 2a <u>2a2b3a3b</u> 5a 7b						
22	3b 7b									

表4 月齢による泣く行為の要素件数とその割合

カテゴリー \ 月齢	3～6	7～9	10～12	13～15	16～18	19～	合計
①生理的欲求	26 (54%)	10 (21%)	4 (6%)	1 (1%)	0	0	41 (12%)
②保育者との関わり	8 (17%)	15 (32%)	18 (25%)	32 (42%)	14 (26%)	8 (24%)	95 (29%)
③物との関わり	0	4 (9%)	13 (18%)	14 (18%)	13 (24%)	15 (46%)	59 (18%)
④行動との関わり	3 (6%)	7 (15%)	7 (10%)	11 (14%)	10 (18%)	3 (9%)	41 (12%)
⑤子ども同士の関わり	0	1 (2%)	4 (6%)	3 (4%)	4 (7%)	3 (9%)	15 (4%)
⑥保護者との関わり	6 (13%)	2 (4%)	16 (23%)	4 (5%)	4 (7%)	0	32 (10%)
⑦体調	3 (6%)	2 (4%)	3 (4%)	8 (11%)	4 (7%)	2 (6%)	22 (7%)
⑧理由不明	0	1 (2%)	0	3 (4%)	2 (4%)	0	6 (2%)
⑨その他	2 (4%)	5 (11%)	6 (8%)	1 (1%)	4 (7%)	2 (6%)	20 (6%)
合計	48 (100%)	47 (100%)	71 (100%)	77 (100%)	55 (100%)	33 (100%)	331 (100%)

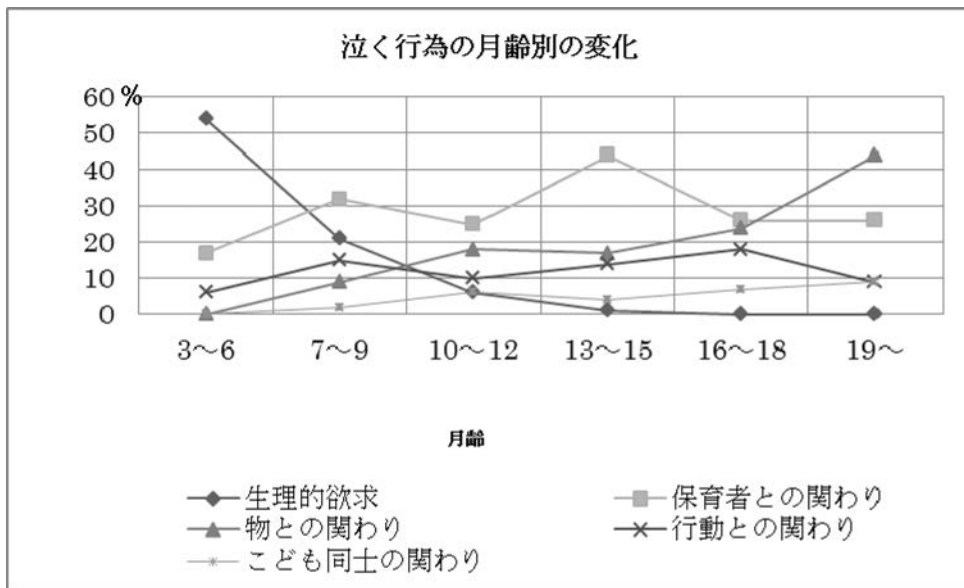


図1 泣く行為の月齢別の変化

表5 入所時に泣いた乳児 (○は泣かなかった乳児。●は泣いた乳児)

	A児	B児	C児	D児	E児	F児	G児	H児	I児	J児
1日目	●	●	●	●	○	●	●	●	●	●
1週間後	●	●	○	○	○	○	○	○	○	○
2週間後	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○

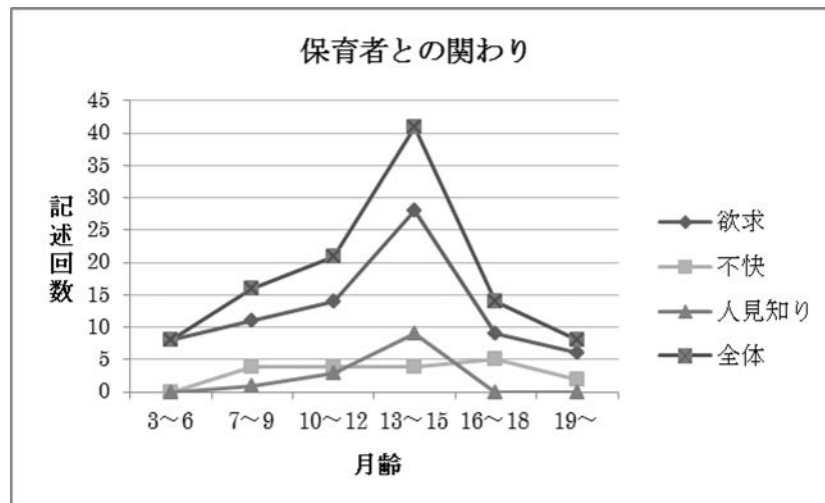


図2 保育者との関わりで泣く行為

事例4 暗い部屋を見て泣く

事例5 嫌なことがあったのか、中庭を通ると泣く

事例1・2・3は、睡眠中に泣いた事例である。この内容だけで泣いた理由を分析考察することはできないが、泣く行為には「お腹がすいている、寂しい、体のどこかが不快である、痛い等の理由がある」（玉川大学赤ちゃんラボ，2012）ことを前提とすると、たとえ睡眠中であっても保育者の目の行き届く環境が必要であるといえる。

事例4は、視覚による「恐怖・怖さ」で泣いた事例である。今回の事例だけで「暗い部屋を怖がる」というのが、人間の生得的なものか学習によるものかは判断できない。しかし、保育者は、視覚による恐怖・怖さには個人差があると受け止めて、乳児に関わる必要がある。

事例5は、記憶によって泣いた事例である。「記憶と泣く行為の関わり」の分析考察は改めてする必要があるが、保育者は乳児であっても「記憶と泣く行為には関わりがある」ことを知ったうえで、乳児の泣く行為を受け止める必要がある。

IV 考察

1 結果の要約

これまでの結果をまとめると以下ようになった。

- ①生理的欲求…生理的欲求で泣く行為は、月齢が高くなるにつれてだんだん少なくなり、生後12か月までではほとんどみられなくなった。
- ②保育者との関わり…保育者との関わりで泣く行為の記述は全体の29%を占め、一番多かった。直接的な欲求もあったが、他の要素と重複することが多く、重複する内容は、物への欲求、行動への欲求、物への不快、行動へ

の不快等様々であった。また、保育者の関わりに対する不快は、物や行動に対する不快がそのまま保育者の関わりに対する不快に結びつくのではなく、乳児の欲求と保育者の要求が合わなかった場合にも「泣く」という行為で不快を表すことが示された。

③物との関わり…月齢が高くなるにつれて、物との関わりで泣く行為の割合も増加した。

④行動との関わり…行動との関わりで泣く行為は、低月齢児でも見られ、13か月から18か月で若干多くなり、19か月を過ぎてからも続いた。その内容は、月齢によって変化していった。

⑤子ども同士の関わり…子ども同士の関わりで泣く行為は、月齢が高くなるにつれて少しずつ見られるようになった。

⑥保護者との関わり…月齢の低い乳児でも入所による環境の変化を敏感に感じ取っていた。乳児にとって入所は大きな環境の変化であり保育者の配慮が望まれる。

⑦体調…乳児は、体調の悪さを泣く行為で表し、保育者も乳児の泣く行為を体調の悪さに結びつけて接している。

⑧理由不明…乳児は、保育者には原因がわからないことで泣くことがある。

⑨その他…乳児は、「視覚」や「記憶」で泣くことがあり、睡眠中の乳児の泣く行為にも充分注意する必要がある。

この結果を、先行研究を基に考察した。

2 先行研究との比較

① 生理的欲求

生理的欲求について、筆者は「乳児保育における保育者との関係性（Ⅰ）」において一定の考察を試みた。その結果、1歳を過ぎての生理的欲求の減少は、乳児が家

庭の生活文化から保育所の生活文化への移行に、おおむね1歳を過ぎて適応したことが推察された。また、言語としては、生後1年を経て言語表出の能力が成熟するにつれて、「生理的泣き」が減少(斉藤、武井、荻野、大浜、辰野, 1981)し、言語による情報伝達に変容していく(志村, 2005)ことで、生理的欲求で泣く行為が減少したことが推察された。

② 保育者との関わり

保育者との関わりについては、別項で詳しく述べることにするが、田中(2005)は、「赤ちゃんが泣くと母親は思いつく世話をするが、赤ちゃんは思い通りでないときにさらに泣く、その繰り返しによって母親には何で泣いているかわかり、的確な世話ができるようになる。これがコミュニケーションを介した信頼関係に結びつく」としている。また、松村(2005)は「乳児は、大脳皮質の発達が十分でないため、不快感、苦痛を訴える場合には泣くことを抑えることができず、筋運動系で表出される情動は、情動体験そのものを示している。しかし、養育者に不快感を知らせ、それを取り除いてもらう時、始めは意図的ではないが、やがてこの仕組みを理解するようになることで、養育者を求めて泣きの表出を行う」としている。保育者は、乳児の泣く行為は情動体験の表出として捉え、応答的な関わり(コミュニケーション)をしながら、信頼関係をつくっていくことが大切である。よって、乳児の泣く行為には大人の関わりが不可欠である。

③ 物との関わり

保育所保育指針解説書(2008)の「おおむね6か月から1歳3か月未満」の項に「周囲の人や物に興味を示すようになる」とある。また、9か月以降の物と人の関係として三項関係⁵⁾が挙げられる。観察記録における物との関わりで泣く行為の記述が6か月まではみられず、7か月から9か月で少し見られるようになり、10～12か月で増加し、その後も増加しながら推移するのは、新しい物への出会いで泣く以外に、二項関係⁶⁾から三項関係への移行も影響しているのではないかと推察された。自分と物、あるいは自分と保育者の関係から、自分と物と保育者という3者の関わりに広がったことが、乳児の泣く行為の広がりにも繋がっているのではないかと推察された。物への欲求を保育者に伝えるための泣く行為であるとも考えられるが、三項関係への広がりや泣く行為の関係については、更なる考察が必要である。

④ 行動との関わり

乳児の泣く行為と行動との関わりは、様々な要素が考

えられたため、考察する内容に苦慮した。また、保育所の0歳児における行動欲求と泣く行為の関わりについての先行研究が見当たらなかったため、保育所保育指針を参考にすることにした。保育所保育指針解説書(2008)には「おおむね6か月から1歳3か月未満」の項に「行動範囲を広げ自ら環境に関わろうとする意欲を高めていきます」とある。行動範囲が広がり「自分でしたい」という意欲が大きくなるにつれて、「遊びを制止されて泣く」の事例のように、乳児の行動への欲求が、泣く行為に発展している可能性があった。また、人見知りが出現する時期に場所見知り行動もあらわれていた。このように、行動との関わりで泣く行為には様々な要素があったが、その中で「タオル遊びがしたくて(待たなくて)泣く」「外に出たいが出られずに泣く」は泣く行為の前に、「タオル遊びをして(楽しかった)」「外に出て(楽しかった)」という経験があり、それが「行動欲求での泣く行為」につながっていた。集団保育における乳児の「行動欲求」と「泣く行為の関わり」や「経験を記憶していること」による乳児の泣く行為については、更なる考察が必要である。

⑤ 子ども同士の関わり

保育所保育指針解説書(2008)の「おおむね1歳3か月から2歳児未満」の項には「この時期友だちや周囲の人への興味や関心が高まります。…他の子どものしぐさや行動を真似したり同じ玩具を欲しがったりします。…こうした経験のなかで子ども同士の関わりが育まれていきます」とある。子ども同士の関係で泣く行為は全体として多くはないが、0歳児クラスでも、集団の発達に応じてトラブルとしての乳児が泣く行為が出現してくるのではないかと推察された。

⑥ 保護者との関わり

保育所の特徴として特に「入所での環境の変化に対する乳児への関わり」という視点で考察を試みる。「赤ちゃんは自分の周りの世界の規則性に大変敏感である」(玉川大学赤ちゃんラボ, 2012)「外からの刺激をとらえて判別する「認知」などいくつかの能力をすでに獲得している」(小西, 2003)等、乳児でも環境の変化を敏感に感じ取ることは先行研究で明らかになっている。乳児が入所時泣く行為は、家庭生活から保育所生活への環境の変化を乳児が敏感に感じ取っているということであり、成長過程であるといえる。そしてその不安は慣れることで解消されていくが、慣れる期間に対しての月齢差や個人差等については、今回の研究では具体的な考察はできなかった。更なる考察が必要である。

⑦ 体調 ⑧ 理由不明 ⑨ その他

保育所保育指針（2008）において、養護に関わるねらい及び内容として、養護の大切さが第3章に明記されている。観察記録からもわかるように、乳児は体調の悪さを泣く行為で表したり、ぐずぐず泣いて自分の状態を保育者に伝えたりしている。また、乳児が睡眠中に泣く行為と体調の悪さの関係については、現場ではよくみられる事柄であり、近年は睡眠時呼吸チェック表⁷⁾等で睡眠中の呼吸のチェックも行われるようになった。また、伊東・中村（2006）は、保育環境に視点を置き、預かり初期のストレスとSIDS（乳幼児突然死症候群）危険因子との関係に着目し、保育施設で発生したSISDについて調査を行っている。その結果、「あずかり初期のSISDの発生は著しく多く、発見時のうつぶせ寝や当日体調不良だった子が有意に多かった」としている。このことは、入所時の環境の変化が乳児に及ぼすストレスとともに、乳児を受け入れる施設としての保育所の環境をどう整えていくのかを考える重要な要素だと思われる。「記憶」と泣く行為との関わりについては、行動との関わりの中でも述べたが、更なる考察が必要である。

3 保育者との関わり

これまで考察してきたように観察記録からみた「乳児の泣く行為」には様々な意味があったが、乳児の泣く行為の理解は、まず「乳児と保育者間の交流」によって行われている。例えば保育者は、乳児が泣き止んだり泣き止まなかったりすることで、何故泣いたかを理解しようとする。乳児は、保育者の対応によって、泣き止んだり泣き止まなかったりして、その意味を伝えようとする。このやりとりのなかで、保育者と乳児との間に信頼関係が生まれていくのは、「コミュニケーションを介した信頼関係に結びつく」（田中、2005）のように、先行研究でも指摘されていた。よって、保育者と乳児の交流がどのようになされているかを考察し、保育者との関わりを明確にしようとしたのが、表6「保育者の働きかけに対する乳児の「不快」と「快」の表である。この表は、「乳児の泣く行為」と「乳児の笑う・微笑む行為」を、観察記録から抜粋し対比したものである。

「不快」事例①「ミルクが欲しいと泣く（H児）」では、ミルクが欲しいという生理的欲求が満たされた時に「快」事例①「ミルクを飲むと機嫌がいい（H児）」というような快の事例が記述されていた。このような「快」の状態は、他児にもみられ、「午睡の後機嫌がよくなった」というように、睡眠後に機嫌がよくなる事例も多くみられた。

「不快」事例②の「腹ばいで遊んでいてしんどくなって

泣く（F児）」は、「快」事例②の「おもちゃで機嫌よくあそぶ（F児）」のように、日頃玩具で機嫌よくあそぶ姿も観察記録に記述されていた。保育者は、日頃機嫌よくあそぶ姿を確認していることで、「遊び疲れたのではないか」「腹ばいがしんどくなったのではないか」と推測していた。

「不快」事例③「担当保育士の声が聞こえるとそこに行きたくて泣く（H児）」では、保育士の中でも担当保育士を識別している様子がかがえ、この姿は「快」事例⑥「保育士が笑いかけると笑う（H児）」のように、保育者を認識し保育者の笑いかけに応える関係に発展していた。

「不快」事例④「水遊びがしたかったのに止めさせられて泣く（H児）」では、「快」事例④「沐浴を喜ぶ（H児）」のように、H児が沐浴を喜ぶ姿が記述されており、お湯に親しんだH児に「水であそびたい」という欲求が生まれたのではないかと推察できる。しかし、経験によって出てきた欲求は、その時の園の状況で受け入れられないことがあり、それが「保育者の乳児の泣く行為に対する悩み」の一つになる。子どもの欲求と集団生活との間で起るこの悩みにどう対応するかは、保育者に求められる課題でもあり、この悩みは家庭においてもみられる問題でもある。

「不快」事例⑤「手に砂がついたのが嫌で泣く」と記述のあった11か月のD児は、「快」事例⑧「砂やコップに触って笑顔」に13か月でなっており、その間何度も砂遊びの経験をする中で砂に慣れ、砂遊びの楽しさを知っていったと推察された。

「不快」事例⑥「外に出たいが出られないで泣く」のG児は、6か月の時から「快」事例③「外気浴にご機嫌（G児）」であり、戸外遊びの楽しさを経験してきた。その楽しさ（快）を知っていることが、外に出たいが出られなくて泣く行為（不快）になっていることは、泣く行為（不快）と笑う・微笑む行為（快）は対立するものではなく、むしろ両方が必要なものであるといえる。

「不快」事例⑦「担当保育士が側にいなくて泣く（F児）」は、「快」事例⑤「保育士と一緒に遊ぶと笑顔で応える（F児）」のような、日々の関わり積み重ねによって、保育者と乳児の関係が少しずつ深まり、保育者への「傍にいて欲しい」という欲求につながっていた。

「不快」事例⑧「甘えて、抱っこを要求して」泣いていた15か月のD児は、16か月になると「快」事例⑩「機嫌よく甘えて声を出す」ようになった。泣く行為で表していた欲求を言葉で伝達するようになるのも近いのではないかと推察された。

「快」事例⑦「トコトコ歩くのが嬉しい」12か月のF

児は、16か月の時「不快」事例⑨「したいことを止められて」泣いていた。探索活動が盛んになるこの時期は、危険なことも多くなる。保育者にはたとえ乳児が泣いても危険だと知らせる必要があるが、それは信頼関係の上に成り立つものである。

「不快」事例⑩「咳が出て泣く（D児）」と「快」事例⑪「体調がよくなり笑顔（D児）」では、体調が乳児に及ぼす影響が記述されていた。

「不快」事例⑪「友だちに押されて」泣いたF児は、「快」事例⑬「友達の登所を喜ぶ」姿もみせていた。友だちとの関係では、「快」と「不快」を経験しながらその関係を広げていた。

「快」事例⑨「ご機嫌で水遊びを楽しんだ」15か月のA児は、17か月の時、「不快」事例⑫「水遊びを止められて怒って泣いて」いた。「快」の積み重ねが欲求となり、それを保育者に止められたことが、怒りという情動として現れていた。乳児の欲求と、それを受け入れられない状況との間で、保育者が悩む事例の一つである。

「不快」事例⑬「甘えて泣く。抱っこしてほしい泣いた」C児は、「快」事例⑭「1対1で関わると笑顔（C児）」になっていた。乳児保育では、たとえ集団生活の中でも、1対1の関わりを求める乳児に対しては、1対1での関わりという「快」の環境も必要である。

「不快」事例⑭「コンビカーが欲しくて友だちのところに行き押されて泣いた」D児には、「快」事例⑩「コンビカーに乗って嬉しそう（D児）」な経験があった。この事例は、自分の欲求が、友だちとの関わりの中でいつも通るものでないことを知っていくそのスタートだと思われた。保育者には、この時どのような声を掛け、環境作り

をしていけば乳児の欲求を受け止めることになるのかを考える必要があった。

保育者の働きかけに対する乳児の「不快」と「快」の事例からみてきたのは、「快」経験の積み重ねが乳児の「欲求」に繋がる可能性があるということである。この乳児の「欲求」は、保育所保育指針（2008）にも「子どもの主体としての思いや願いを受け止め」とあるように、大切にされるものである。しかしその欲求は、集団生活のなかで、すぐに受け入れられない場合があり、保育者は、そのジレンマに悩むことになる。その時どう対応するかは保育者の養育観とも関係する課題であるが、基礎となるのは乳児と保育者の信頼関係であり、その信頼関係は、「泣く行為」を受け止めるだけではなく「笑う・微笑む行為」という「快」の積み重ねからも生まれることが明らかになった。

このように、保育者と乳児の信頼関係は、日々の応答的な関わりとともに、1年間を通して行われる保育者と乳児との交流で築かれるものであった。保育者は、信頼関係を築きながら乳児の泣く行為に対応する必要がある。

V 今後の課題

乳児の泣く行為のカテゴリー化に対しては、その分類が非常に困難であった。その理由は、そもそも乳児の泣く行為は様々な要素を含んでおり、そのうえ乳児が何故泣いたのかは、全て大人が推測するしかないというところにある。しかし、あえてカテゴリー化しその中から保育者の役割を導き出そうとしたのは、カテゴリー化することで、筆者自身が乳児の泣く行為をより理解できるの

表6 保育者の働きかけに対する乳児の「不快」と「快」

事例	不快（泣く行為）	月齢	快（微笑む・笑う行為）	月齢
①	ミルクが欲しいと泣く（H児）	4	ミルクを飲むと機嫌がいい（H児）	3
②	腹ばいで遊んでいてしんどくなって泣く（F児）	6	おもちゃで機嫌よくあそぶ（F児）	5
③	担当保育士の声が聞こえるとそこに行きたくて泣く（H児）	6	外気浴にご機嫌（G児）	6
④	水遊びがしたかったのに止めさせられて泣く（H児）	7	沐浴を喜ぶ（H児）	7
⑤	手に砂がついたのが嫌で泣く（D児）	11	保育士と一緒に遊ぶと笑顔で応える（F児）	8
⑥	外に出たいが出られないで泣く（G児）	12	保育士が笑いかけると笑う（H児）	8
⑦	担当保育士が側にいなくて泣く（F児）	14	トコトコ歩くのが嬉しい（F児）	12
⑧	甘えて抱っこを要求して泣く（D児）	15	砂やコップに触って笑顔（D児）	13
⑨	したいことを止められて泣く（F児）	16	ご機嫌で水遊びを楽しむ（A児）	15
⑩	咳が出て泣く（D児）	16	コンビカーに乗って嬉しそう（D児）	15
⑪	友だちに押されて泣く（F児）	16	機嫌よく甘えて声を出す（D児）	16
⑫	水遊びを止められて怒って泣く（A児）	17	体調がよくなり笑顔（D児）	16
⑬	甘えて泣く。抱っこしてほしい泣く（C児）	17	友達の登所を喜ぶ（F児）	16
⑭	コンビカーが欲しくて友だちのところに行き押されて泣く（D児）	18	1対1で関わると笑顔（C児）	18

ではないかと期待したためである。その意味では、観察記録の分析考察によって、保育所生活における泣く行為の意味と乳児の成長による変化、それに対する保育者の関わり方の意義と課題等が、筆者にも少しみえてきた。それは、観察記録から様々なことが読み取れるということであり、保育者が日々、子どもの状態に目を向けながら保育をしているということでもあった。乳児にとっては泣くことが大切であり、そこに関わる保育者の働きかけが重要であることもみえてきた。そしてそれは、保護者支援においても同様である。

最近保護者から「子どもがつかまり立ちをして泣いたが、どう対応したらいいか」という質問があった。筆者は今までの保育経験から「座りたくて泣いたのだから座らせてあげたらいい」と即座に思ったが、研究を進めるにつれて「この保護者の質問は、子どもを大切に思うがゆえに発せられた質問ではないか」と思うようになった。もちろん月齢にもよるが、「泣く行為にすぐに対応せず、自分で解決方法を見つけた時、その行為を認める方法」もあり、「子どものためにはどうしたらいいのか」を保護者は聞きたかったのではないかと気が付いた。

このように乳児の泣く行為については保護者も悩むことが多く、保護者支援においても乳児の「泣く行為の分析考察」の必要性を感じている。と同時に今回の研究で、「泣く行為」には、「笑う・微笑む行為」つまり「快」経験の積み重ねも必要であることを改めて知ることができた。この研究に取り掛かった当初、泣く行為の分析のみで保育者との関わりを導き出そうとした。しかし、それでは「泣く行為に対する保育者の悩み」が深くなるだけであった。その時「保育者がいかに子どもたちと「快」の関わりを持っているか」に目を向けると、保育者は、信頼関係をもとに「乳児の泣く行為」に関わっていることも考察できた。

先行研究で、「経験年数による困り感の違い」（根ヶ山ら、2005）が指摘されているが、乳児の泣く行為への対応には、保育者の乳児理解と推察という想像力が必要である。だからこそ、困難であろうとも保育者が今まで経験と勘に頼ってきた保育を言語化し、明確にすることが必要だと考えている。そうすることが、乳児保育における保育の質の向上に繋がることや、乳児保育における保育者の役割の重要性が理解されることを期待している。そのために、微力ではあるが、乳児の「泣く行為」の考察や、「笑う・微笑む行為」の考察に向き合っていきたいと思っている。

註

¹⁾ 保育に携わる者の呼び名としては「保育士」が使われるが、施

設によって「保育教諭」や「看護師」、免許を持たない「保育助手」が関わったりする場合があるので、論文内では「保育者」に統一した。

- ²⁾ 2012年5月から7月にかけて、A市において、その年の0歳児クラスと1歳児クラスの担当保育士を対象に筆者が行った質問紙調査。A市の保育課に依頼し、全33の保育所保育園に質問紙を配布、全園の保育者173名から回答を得た。乳児の「泣く行為」と「笑う行為」に対して様々な意見が寄せられた。
- ³⁾ 筆者は、2015年、乳児保育における保育者との関係性（1）で、主に乳児の「情動」の観点から考察を試みた。
- ⁴⁾ 情動。近年、情動という語が情緒の同義語として用いられるようになった。情緒とは、喜怒哀楽などのように、刺激によって引き起こされる急激な心理的、身体的変化のこと。情緒と同義語的な用語として感情があるが、一般的に感情は情緒よりも広い概念で用いられる。基本的な情緒として、Ekman（1975）は驚き、恐れ、嫌悪、怒り、楽しみ、悲しみをあげた。またBridges（1932）は、出生時の子どもの情緒は不快を帯びた興奮状態で、その後3か月ほどの間に、興奮の他に不快と快が分化し、6か月頃に不快は恐れ、嫌悪、怒りに細分化すると報告した。（乳幼児発達事典。1985）
筆者は、実践の場における保育者が、情緒（情動）と感情を混同しているのではないかと思う場に出会うことが多くあった。よって本研究では、情緒と同義語的に使われる感情と区別するために情動という言葉を使った。
- ⁵⁾ 三項関係。三項関係とは、「自己」と「他者」と（対面の二者間の空間以外にある）「もの」の3者間の関係を指す。ヒトのコミュニケーションの発達においては重要視されている。（脳科学辞典。2013）
- ⁶⁾ 二項関係。自己と他者、または自己と物との2者間の閉じられた関係。（脳科学辞典。2013）
- ⁷⁾ SIDSチェック表。突然死症候群防止のために、睡眠時の呼吸をチェックする表。

引用文献

- 保育所保育指針解説書（2008）. 厚生労働省編. フレーベル館. pp32-54.
- 伊東和雄・中村徳子（2006）. 保育預かり初期のストレスとSISD危険因子の関係について. 小児保健研究第65巻第6号 pp836-839.
- 開一夫（2011）. 赤ちゃんの不思議. 岩波新書. pp1-28.
- 小西行郎（2003）. 赤ちゃんと脳科学. 集英社. pp29-58.
- 根ヶ山幸一・星三和子・土谷・松永・汐見（2005）. 保育園0歳児クラスにおける乳児の泣き－保育士による観察記録を手がかりに－保育学研究第43巻第2号 pp65-72.
- 松村京子（2006）. 乳児の情動研究：非接触法による生理学的アプローチ. 日本赤ちゃん学会ペーパーサイエンス pp1-9.
- 斉藤こずゑ・武井澄江・荻野美佐子・大浜幾久子・辰野俊子（1981）. 生後2年間の伝達行動の発達－母子相互作用における発声行動の分析－. 教育心理学研第29巻第1号 pp20-29.
- 佐々本清恵・大方美香（2015）. 乳児保育における保育者との関係性（Ⅰ）－観察記録からみた乳児の「泣く行為」より. 大阪総合保育大学紀要第10号 pp139-149.
- 芝田奈生子（2005）. 日常的相互行為過程としての社会化－発語

- ターンとしての〈泣き〉という視点から. 教育社会学研究第76集 pp207-224.
- 志村洋子 (2005). 乳児の音声における非言語情報に関する実験的研究. 風間書房.
- 玉川大学あかちゃんラボ編 (2011). なるほど!赤ちゃん学. 新潮社 pp18-24.
- 玉川大学あかちゃんラボ編 (2011). なるほど!赤ちゃん学. 新潮社 pp190-217.

参考文献

- 阿部和子 (2007). 乳幼児保育の基本. 萌文書林.
- 陳省仁 (1986). 新生児・乳児の泣きについて初期の母子相互交渉及び情動発達における泣きの意味. 北海道大学教育学部紀要 48巻 pp187-206.
- Danie N. Stern (1985). The Interpersonal World Of The Infant: A View from Psychoanalysis and Developmental Psychology. 乳児の対人社会 (理論編) 小此木啓吾・丸田俊彦監訳 神庭靖子・神庭重信訳 (1989). 岩崎学術出版社.
- Daniel N. Stern (1985). The Interpersonal World Of The Infant: A View from Psychoanalysis and Developmental Psychology. 乳児の対人社会 (臨床編) 小此木啓吾・丸田俊彦監訳 神庭靖子・神庭重信訳 (1989). 岩崎学術出版社.
- Erik H. Erikson (1950). CHILDHOOD AND SOCIETY. 幼児期と社会1 仁科弥生訳 (1977). みすず書房.
- Erik H. Erikson (1950). CHILDHOOD AND SOCIETY. 幼児期と社会2 仁科弥生訳 (1980). みすず書房.
- 星三和子・塩崎美穂・勝間万喜・大川里香 (2009). 保育士はゼロ歳児の〈泣き〉をどうみているか—インタビュー調査から乳児保育理論の検討へ—. 保育学研究第47巻第2号 pp49-59.
- 小林芳郎編 (2012). 発達のための臨床心理学. 保育出版社.
- 大方美香 (2005). 乳幼児教育学. 久美株式会社.
- 田中順子 (2004). 情報社会における子供とのコミュニケーション:「双方向性」の意味を問い直す. 情報社会試論 VoL9.
- 田矢幸江・柏木恵子 (2004). 乳児期の社会性対人関係の発達—保育園登園場面の観察から—. 発達研究第18巻 43-56.
- 吉本和子 (2002). 乳児保育 一人ひとりが大切に育てられるために. エイデル研究所.

The Crying of Infants and Human Contact (II): An Observation-based Study

Kiyoe Sasamoto^{*}, Mika Oogata^{**}

^{*} *Osaka University of Comprehensive Children Education Graduate school*

^{**} *Osaka University of Comprehensive Children Education*

Focusing on the crying of infants at a nursery school, this paper aims to identify the reasons for their crying and the role of nursery teachers in that process. The authors have analysed the records in which nursery teachers observed the behaviour of ten infants for the year starting 1 April 2012 when they joined Nursery School A in City A (except for one infant who started attending the school on 20 October in the same year). The infants were all aged between 0 and 12 months when they joined the school. From the records, the authors have selected descriptions involving their crying, and classified them into nine categories in order to gauge the effects of the teachers' responses. We have found that the infants cried because they had 'the direct desire to seek the teacher's attention', but they also cried to express a 'desire involving a good or an action' or 'discomfort involving a good or an action'. When the crying involved a good or an action, the frequency of their crying increased as they became older. Younger infants also cried because of a good or an action, but the exact reasons changed as they became older. They started to cry in response to other infants as they became older. Younger infants cried in the presence of their parents when they started the school, presumably because they sensed a change in their environment. The infants cried when they were unwell, and many parents responded to their crying based on this assumption. Some infants cried while asleep, and this type of crying may contain a request for urgent help and require special attention. All in all, the infants cried for many reasons, and their crying depended on their personality, age, environment, and physical condition. Therefore, the nursery teacher has to respond to their crying case-by-case, considering these factors. It is equally important for nursery teachers and other adults to take the infants' stage of development into account in responding to their crying.

Key words : infants, crying, the role of nursery teachers